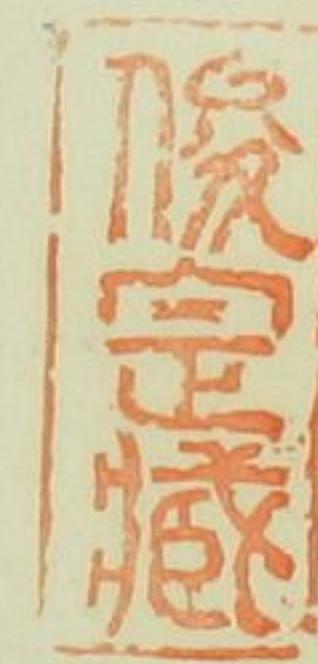




去来抄 下

修行教



下  
去來曰蕉門に千來不易詩句一時游り乃句どうある  
是を二句よつけく改修（ともうちえき）一なり不易哉  
かくもくと基立（もと）ゆりとあくまね風新（もと）  
不易ハ古（もと）直（ただ）く後（のち）叶（は）むながた（もと）千歳不易（とうじゆ）  
流（なが）ハ一時（ひととき）くの變（か）へてまわるの風（かぜ）を（もと）直（ただ）くあ  
今日（けふ）秋（あき）風（かぜ）を望（のぞ）み小（こ）用（もち）ひゆ（もよ）め一時（ひととき）游（なが）りと（とも）そば  
て（と）紙（かみ）（もと）す

魯町曰佛諧乃墓とさいたに去來曰詞すいひくへん吟詠  
するもお品あり歌をも一なり其中やあるあともいふ以を  
ち一なり甚ぶくとあくちかく向時ハ佛諧連歌ハかく  
どうれむおなじくわのつゝきく新舞一弓をうたはる  
ま直まといふがとするども詩や歌す、旋頭混本歌  
や知れぬ事せりてを筆を佛諧も文を書ハ佛諧文なり  
放とよすと佛諧歌なり身の行ハ佛諧の人なり嘆ひに  
見と高く一古をやゆり人を遠ざけむのゆゑあひ云ひ  
ちへりとおひとを苦一かくそり墨量自慢あひといふ

連歌の名同とかすといふは段炮とありとも乱奏となりと  
一家の風と云ふれー

魯町曰不易の句おみきいに去來曰不易の句ハ佛諧乃神  
モテイテ一の物教奇あむに句なり一時ノ物教奇あき故  
古今に叶へ里たどく

月平柄とよべりとよしに固ふ 宗謫  
うれはくとくらり花のづ 桂山 貞室  
秋の風伊勢の墓歌ねすらー 芭蕉

是等の類之魯町曰月と園と名すもお教奇あすや  
去來曰賦比興ハ泥諧のうちにかまく吟詠の自然なり凡

吟よあらんとおせは三日とても御まふ一拍板あとハ  
いひきー

曾町曰流行の句へいたに吉本曰流りの句きたのくつ一つの  
拍板すありてそやる也形容衣裳器物にいふまで時こ  
乃くやまとあるのとくたゞへ

むすやくよ夏よこづきの累さうる

け神えトく拂りす

あわハねすてこそひへあま 狂書 松下

浦充肥すせ光瘦すも友ひなむ

常矩

或ハとどきあゆひハ旅書の詞ひみを謡の詞とうむと

拍板すあらまよとても一時の流行一拍板とく日ハおよる  
人か一曾町曰むすやくよ夜にうきうりすをねあくまや  
去来日強き歌の一章うきすを拍板すあくまや歌込すと  
歌とほうりあき

曾町曰不易流行其え一なりともいふ吉本曰苦事辨一  
うきすを人倅みちとていても不易を無為の時流り  
坐卧行住屈伸伏仰乃般同くうきすをうり一時くの  
変風乞之姿ハ時に替るといても無為も有為もりとは  
曰一人也曾町曰風と變るはちくありともいた  
去來日本をうきすして本と變る時を或ハ變風を變風

佛階さだまを離れ或は離れまいとも清らか

曾町曰某ちより出まゝましもいへて吉東曰某ちと申

すくは解へるが、じきあつたるをもゆ一いづれ  
きあつてもゆりすをもつて先ゆのゆふ、てよま

負固う松子、門をもとまほひ

流あり蓮乃義あるとく雨をひまつゝ

言葉の記述又文字の概念

昔有王門人，一夕夢一虎，虎告之曰：「汝當成大器。」

佛詣歌体よりハレモトホシノアラム

魯町曰先陣も基づりおもむ風はるゝや 未来曰奥州行御乃  
あはまもあもせり御のうちニユマトシテアラモアリ行御の  
うちにも あもじさんやも甲の下おまくと須とふ句あり  
後おわなおニ字と捨らふり是のうはあん異体乃句  
あともとすき持ててもお多一此年の多めを不易流の  
教と説けへよ魯町曰不易流行の事を言説みや先陣乃  
參明すやお東曰不易流りハお事お渡す也志れともお  
の先達乞ひふ人なり 長頭丸お東毛と辻る一神  
久しく拂り一 角弓や傾けのまゝ丑のと  
をす水あげて咲せよ天龍まともつまことに吟へり

世人といふ所を教のよき物と爲るは風と  
變する事無く宗周師一度もうりそむく事  
破風新風と天下を廣り一傳もいまと此教ふ

ナリ一よりこれの都鄙乃宗匠を言風と用ひ一旦流く  
モ起せりとも又モ風ともかたのうねりて時々變す  
つまびらかに先師を一めで施設乃が作と見つけ不易  
乃句とさまで風を時々變ある事と見る所の句  
變ある事とから教の餘生と見る所先師嘗て曰宗周を  
んじかく徳音の眞徳の徳と稱する一宗周は皆  
中興周山なりといへ

大艸曰不易の句も當時を仰てゆゑて是も又はりの  
句もかくゆゑ也

去來曰益門より不易流の詮説くも或ハ首の一匁くもを  
云競あり是も流行のあくびのあくびだとも不易流の  
教どつてまことに仰一時くは変風の事也

去來曰俳諧と修竹せんと思ひうぢうぢ時代く乃風  
宗匠の体と能く考究盡つて是故も時々新古  
なづく分野ねなり

去來曰俳諧の修竹者ハたゞのゆゑに風流先達乃身紙  
一すじに尊う學ひも一句くに不審焉と雖も様

或ハ功者ニ尋明む一我ハ流傳於よき事無く人  
人皆句も聞れまじかへ始より一句ノ後とくも其  
他亦多吟味のうち自らかくもて經て功成する  
トクル先師曰今お詠諧を日ひめにせざす席に  
のうんでは氣縛<sup>サ</sup>を以て吐極<sup>シ</sup>公頭を落す<sup>シ</sup>は  
支考曰ひづれ詠諧を如來禪のよきがといふは  
祖師禪乃<sup>シ</sup>捺著す<sup>シ</sup>モ即轉す

去來曰先師を門人<sup>シ</sup>教誨<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>極<sup>シ</sup>予示一  
絶<sup>シ</sup>すば句無<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>念を入<sup>シ</sup>ねま<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>句は

も<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>御意<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>凡<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>口<sup>シ</sup>に  
十七字<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>字も<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>詠<sup>シ</sup>諧<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>モ  
之<sup>シ</sup>和歌乃<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>体<sup>シ</sup>なり句<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>化<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>  
之<sup>シ</sup>き化<sup>シ</sup>ち<sup>シ</sup>氣<sup>シ</sup>性<sup>シ</sup>口<sup>シ</sup>質<sup>シ</sup>よりて<sup>シ</sup>なりあ<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>  
輒<sup>シ</sup>ち迷<sup>シ</sup>へ<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>から同門<sup>シ</sup>の中<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>て速<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>  
先師曰<sup>シ</sup>參<sup>シ</sup>句<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>即<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>上品<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
酒堂曰先師曰參<sup>シ</sup>句<sup>シ</sup>ち<sup>シ</sup>ゆ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>ね<sup>シ</sup>二<sup>シ</sup>三<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>下品<sup>シ</sup>  
仙<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>城<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
先師曰參<sup>シ</sup>句<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>即<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>ア<sup>シ</sup>金<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>竹<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>生<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>ね<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
玄<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>紙<sup>シ</sup>上手<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ひあ<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>下手<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ひ

許六日後句々取合て化す時を句多く出来まゐる  
初學が出来るとわざと書く 功者乃至ては取合不取合の  
論である

許六曰農句ハ題の曲輪を發出す所ノ一廓のうちよは  
かくもあれ也自然曲輪乃中よきハ天也ヨリモ帝也

志未曰參句を曲綈の内みならむもむかへ即興感偶  
する所を多くは因みありがとす常に案るに内を多く  
多くハ古人の糟粕なり千里をかけ出で吟ちる時々句  
わゆきおもひて第一等類ぞのうは初学の心思をよ  
ませ功を以て及すハ又内外の論よりあへん風雲流俗

白鳥曲輪の内なり予歩事を示すち電と便利なれど無事  
よみが傳わさずかうるゝ事す 十月は皆さへやまと  
別とすと同様皆をもたらし駒込と申す  
去来曰他門と蕉門とす一葉に遠ひありと身のせ  
蕉門を景情ともてす有よと吟す代流を心中巧ま  
と見えりたゞくと津蓮葉夜とすもれとさせつ舞  
元日お堂へまよひに舟出川り 鴨川や二度めお納シテ船ボウ  
とくまく 禁岡よ蓬生なむ 滋陽よ舟なむ 船ボウ

去来曰蕉門の發句ハ一字不通乃田丈十歳以下の小兒も時尔

よりてよき句あり却る代門の功者といつれくとえあら  
代流もも流乃功者ありとれハモシ御めよき句もも  
トドキえり

去来曰詠諧多新意と專みすといても物外か情を遠す  
いゝも然るゝあへぬ若其事ばらうてりふるを品ありたゞ  
感時花凋、涙別鳥驚心或き桜花ちとぞちとさんあへばと  
かのうのあてもんなくにあいておひなり感時惜別  
大ま人の思ふる是等一首乃眼也

去來曰詠諧ハ火と水みいひもすく清浦といへ聖迷ひて  
雪乃降る身を汗とすきたりとくわむくわくわくわく

人ありまつ火と水とはうりとくりひもすくとまふを故  
はうりとくり故なり雪の身を汗とすき一句能ひゆゑ  
ハモアモも聞くと筆ひきと筆ひきと筆ひきと筆ひきと  
ちひきと筆ひきと筆ひきの筆ひき

吉本曰句葉ふニふあり趣向より入る又詞道景より入る  
なり初乃奥より入る人を言ひ歌作多句也趣向より入る今  
遜吟寡句也さむじ葉一と歌作多論多時を趣向より  
入る多とす詞道景より入る多とハ和歌者流玉を燐  
トススエマリ詠諧多もあもくらんまくらん

去來曰蕉門小同巢同竈と云事あり是を前吟の傳承

ふ今すれど此句也たゞ筆と竿とを以てねまくこと  
句を刀の端う障るふさるゝ或ハねまくこと  
よひういふ也同竈乃句ハもかくまへたれど見よ  
生まうぢんハ又手柄なり

先師曰去來汝いま句お婆をもすや同一事も引ひつて  
坐ありとて坐りてはり支考り風流とてまくらと  
去來曰句に詰路とてあれあり句うつまの事也 詰路を  
盤上と玉のはるゝとて 滯なまきとす又まく柳の風に  
乱るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
あるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
一句二句八曲とまざるもあらず一またまほほほほほ  
まほほほほほほほほほほほほほほほほほほほほ

先師曰發句、昔より様、督す侍の附句ハ之変にと  
りれども、ハ附物とぞ、中以て公附とぞ。

人うき移豆等尔保以位といす附るをト  
杜年曰いふる候等匂ひ移豆といふ事  
去来曰支考モアキと書出せり是モキモトム  
ヨモシテノイア先師の評をあけたまへん代ハ行  
マキシムヘ

赤人乃名モアリトシル川島 史邦

キモサヘテ合魚ムシヘ 去来

先師曰アツヒヒヒヒヒヒヒヒ  
シケラレムキアリナリト怪ハジハタリタヌカシム  
自ひトシモ移豆モワケル句化哉あやにて

シテシテの境を以て冷暖自知ノ時モハ惜シ  
むる事あるゆ此モア 赤人の名モナリスド  
キモサヒモモーおなづけツムヒトシモシモシ  
トシモシモシモリ合兵する一トモはおつまリトシ  
味シテシテは舞一寄ハアハアハアハアハアハ  
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

先師は句を引テ教示して右の手にて土番を打つも  
左の手みて太刀をさしくる事似合て諸事似合  
一句くに趣のかゝるを以て言語を齒へて紀之云

看破せしるべ

杜年曰句の位とはいふ事も去來曰前句詩後を云  
く附る事なりたゞへよき句ありとす位寫せしるべの如  
先師の意の句をあけといふ

よきれ千葉まさむらもくもくめく

馬みおぬ自は因てうひちく

前句き人の妻みもあく武あ町アトサヌモアく宿金

向度サトサナリト見テ傳を言ツルもあれ也

細き因に花なる人の頬ちに

あくまゆる色もれ被れ綿ちひ

前句古代ノ人のありさ高ナリ

白粉とみゆくも下地くろい筋  
波立りや一筋神のなきよ筋

前句のまゆうやの如く身や

尼うるうてよ霄乃まくみく  
月新よ霞うやんススム

お句いづもてだまかぬの妻と身

ふすぬつんと洗ふやうす  
鳥乞み鳥おうう成持せしや

前句町家のうりもとよつまう是をきて代をあま

くちくわー

杜年曰面新とて附きと云ひて吉本曰うづりに附句いふ  
附格の字も書也おもづけを附せし其事也むづかず  
主事成亦ふ附くりうづれと面新とて附るといふ  
草薙にあはくとてハナアリ

いのちう生ふ 撈集乃川治

初き和哥の裏様をあくまく附くり

先師曰前と西り能用多きの境界とあくまく  
さくまくにありと附んとあくまくじた面新とて  
附くりとてがくまくほいぬいと面西り能用の面新

あくまく又人とまことよめうらもあくまくとて

參るめめにうづれすゝ山

因縁のあくまくは人と書く

先師曰いのちう面新そらわも序あくまくとあり面新のす  
支考も書ゑてうづれとて書く

支考曰附句ハ一句より一句せ前句附もとをいのちもと  
一連説みりてこそ甚場う人甚時節等前後の  
見合ありて一句に多ハあまう物也

吉本曰附句ハ一句より千万也故ふ離緒変化極化  
支考ウ一句より一句とて附る場の事なる一附る場を

多くなづむね也句も一場の因みまいにまつて

先師曰氣色まいりとくにても与て天象地歎人事  
草木虫鳥獸のあらへれど敢容みもく多み也

支考曰附句ハ附る細あり今於雜著きつまばとく  
先師の句一句もつうさむか

去來曰附句ハ附る細く附句みあはれ附るは處を別  
今み化者附る事を初人の業の程をおほえりけり  
附る句多一世人も又おほき人乃ひも事と細く  
附する句を咎めに却るよく附る句を咎ふやうに  
あつまつとは言ふたる事も多うれ

去來曰附ゆるてつけ又公附ゆる附るも附る多節事  
附ゆるがるれ情をひくに附んすは前句付く川を向い曾  
をくしてハいつまづ處うての附んぬる事も事也

去來曰蕉門の附句ハ前句の情と門あると嫌ふたる事ハ  
是いふる所場いふば今其事も信とく思ひ立事  
きづき立ちて附

先師曰附ゆるく附る事當時好じてても附ゆる附  
くもよしとされたりと附ゆるて付くじハ又多細も事  
宇鹿曰先師十七の附る普通は傳授一経でくわざる事  
ま境内の門人の取引依て附方を書き出一経ふさんと後く

とせば附方は是より多く人の迷ひを解く爲  
於ら風字半音一音七十ヶ条と云ん矣えり是と  
傳文とてたゞくとて大津にての事とすじむれ  
路通も其反言或捨ひとりて人を教るも許ひはすと  
称ひゆるハ千那法師なり

去來曰附句ハ何事かくまくとすやうとす卷を  
よむに思業工支一す附句をすじむ事也

去來曰風ハ千変万化とくりても句体新しく清く潤く  
體なる正く厚く圓なる和を既圓なる解するがく  
速なる如火ハア純く濁り弱く重く薄く毒く

潤く駭一く言ひかくのとおハ無一但一聞すと純なる  
句すと善惡ある一

支考曰附句ハ句を彰言す附る場を彰言す

去來曰言風の句を用ひては場よりての事と古風の  
すみはいふ言作乃くらうすす有一

先師曰一巻表より多捕を一辭あんハアム一語一  
去來曰一巻面を章表ふ化と一初の裏うちもこう  
表すと物教も曲も五つ一羊より多捕の裏ようけ  
てハアムと骨引ぬやみ化と一ホラ至ては互に  
退屈いてましむ捕也行づま向わんとす候却向ま

アリてちあぬねよりさけくまほくまし吟席いたみありす  
好き句出来んとそ理止むよをあす好句と思ふむくら  
といすまく

其角曰一巻ふ多句九句十句有も一二句好句あらハ浦  
能句せんじわづかくは御部ら不出来たるも好なりいま  
好句ふくらむしらハ浦が好句と申す也

吉東曰附物を附す事當時嫌の候ふとまわうと合  
一巻ふ一句二句やんハノ風流るべ

浪化曰今古詠詠物相詠多用ゆる事いゝ告東曰同くハ  
一巻ふ一二句あらま原一稿裏の中よ待人り一一小悟門の

健も門中の翁なり此集撰む時ねくりおの句ちくちく  
棕櫚よの句を化して入経つも

吉東曰凡吟ある時を風あり風を必変す是自然の事  
先師乞狀よく見なす一風にちくちくすままでますと  
示一様つむだらひ先師の風なりとも一風であつて変化  
をきくさふを却る先師状うろこにちくの

杜年曰幾句詠若憲ハイヒ去東曰幾句ハ人のまゝとひと  
感ふるうトハモあくまゝと云ハモ所也さあくまゝとや  
りあくまゝ次へさあくまゝと云ふ事下也

杜年曰幾句と附句の境ハソレ去東曰七情万景こううに

西の句ある薺句あり附句ハ常なりたゞハ学の極もとあり  
テアシテトモ多義句あるに至る所の事と通する所とある  
哉句也杜年曰公の西の句は皆義句あるより古事日記も  
義句なると成るめりありたゞ

つき出ひや植のほすりのひきふら 好春

此句を先師の古比の蛙と曰へておもへる事  
アリ一く多義なり さそりのもとすり興もありじ  
アリト 薺句すまむー

野明日句あきひきいふゆめ去来曰あひハ句のみや  
因寂ある句さよまあへたゞハ老人の甲冑と帶

鐵塲は働き錦繡をかき拂妻の侍りても先の姿をうそ  
駆るある句にも静ある句ももももせなりたゞ  
花ちや白さからうとつきあふせ

先師曰あひ色づくわく

跡明日句の位ともいふれまちあき東日こうもえ一句多く  
和の形れたらねるやうも圓の門  
先師曰句の位も常あるにあり吉東日年竟句停を  
格のよきにあり句中の理属をひし或ハねどたゞ(或ハ  
あひ令る義句)ハ停てまわせ

跡明日句けまちり細いもとあがみや吉東日きり

ハ哀なれ句よりは細ハたゞりと紀句みありはそぞり  
句お變より細を句おぞろもあす是も證句とも思て  
いふ

十處ふも小粒みありぬ秋乃風

先師曰け句ありあり

多きもを麻つてゆき余吾の海

先師曰け句細もありと評一絶りと也

吉東曰想一てさひ修細をもぞうの事ハ以心傳心ふにモ  
嘆先師の評ばかりを教る所も化多行て明じて  
先師迂化ノ年深川を出候ふと既而坡問曰といふ

やくり今のとく作一作せや先師曰ちくく今の角  
をも一みち年もよもむかハ又一變あじとす判  
今年素堂子治のとく作つて曰慈翁の遺風天下に  
滿て漸く變すつる時ひしと告子そろそとと因  
して我と吟舎て一つの新風を興らせんとすと來春云  
先生の言がけなく悦び侍る予も兼らは思ひも起さ  
あくまくハ一度天下の人とねくろせんすれども世波  
老の波日くじかまくり今を風雅と遊ふ事紀によも  
かくじく嘗てあるむい侍る所とや素堂すを

先師の古友す。之博質質才の人なり。されハ世小僧名  
え。近來はひたすらすまへがふといても又いふる。愚と  
吐出をもんもおきりいふか言ふましまる。

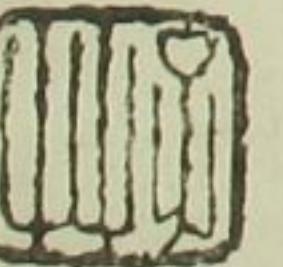
於暮雨巷 嘴居士一音書

大尾

太來抄跋

嵐岡之璞。非人採之則誰知。璞之爲玉乎。一  
日先生。弃二三子游焉。得諸幽蘭之下。琢  
而磨之皓々乎。世所謂玉鏡也。使對之。膺心  
在塵埃之外。則去末之功至是可謂。熒輝千  
歲矣。吾徒愉快其在於斯。

井士朗



跋

安永四年乙未三月

新椹木町二条上元

井筒屋庄兵衛

堀川錦小路上元

白都書林

西村市郎右衛門

辻井吉右衛門

知新齋藏版書目 京都寺町松原上元處  
辻井吉右衛門

西溟餘稿

大潮著文之部

三冊

西谷名目首書

四冊

部類現葉和歌集

十六冊

同詩之部

同右

二冊

辨天利益和談鈔

五冊

桐火桶

定家卿二冊

松浦詩集

同右

三冊

日蓮大御傳記

十冊

拾遺謠

廿冊

四書白文

三冊

唯識義章

十二冊

上懸小枕謠

暮四冊

同字引

小本一冊

一冊

同義林章

二冊

下懸小枕謠

暮四冊

山海經

七冊

魚山萬芥集

一冊

同外畧

四冊

李嶠雜詠集

二冊

同南山進流

一冊

拾玉用文宝箱

一冊

唐僧詩選

二冊

聲明系譜

二冊

女初學用文章

二冊

千家詩首書

二冊

梵書朴筆手鑑

二冊

長者教

一冊

三體詩歌留多 箱入

聖一國師法語 一冊

南海治亂記 大冊

廣益和玉篇

一冊

施餓鬼分解

一冊

商賣往來

一冊

書翰諺解

一冊

六祖法寶壇經

一冊

今川腰越

一冊

局方發揮

一冊

觀經厭欣鈔

三冊

實語教

一冊

察病指南

三冊

徃生要集和解

八冊

子昂赤壁賦

石摺  
真書 一冊

俳諺去來抄

尾張鳴春先生訂正  
東奥門人呑溟校

三冊

唐詩印譜

雲花園  
篆刻 一冊

同菴翁遺書白砂文集

右口門人  
臥央校

一冊

俳諺橫の並

士朗撰 一冊

同許六問

右同門人

白圖  
亞滿左校

三冊

同ぬきあく方

右口門人  
都貢士郎著

一冊

寛政四年 丁巳月

越後刈船錦水閣瓢哉

